

# 国語科

中山典子  
山岸哲学  
清水義之

## 1 国語科における「よりよい未来を志向する子」

新学習指導要領では、国語科において育成をめざす資質・能力を、「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」とし、国語科が国語で理解し表現する言語能力を育成する教科であることを示している。さらに、子どもが学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目してとらえたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることである。「言葉による見方・考え方を働かせる」ことが、国語科において育成をめざす資質・能力をよりよく身に付けることにつながるとしている。

そこで、本校国語科では、上記の資質・能力を意識しつつ、「話す・聞く」「書く」「読む」ことの知識や技能の習得を図るとともに、子どもが習得した知識や技能を用いて思考し、判断し、表現することで、実生活や実社会で生きて働く国語力を育成していくことをめざす。目的意識や相手意識をもたせることで、学習の見通しをもち、場面に応じて言葉をもとに論理的に思考したり、豊かに想像したり、適切に言葉に表したりしながら、子どもは言葉と対話をする。そこには根拠があり、根拠をもとに他者と対話することによって、子どもは多様なものの見方・考え方を知り、見方を広げたり、考えを深めたりして、もう一度言葉との対話をする。そのような対話をくり返し、自分の考えをより確かなものにしていくことで、子どもの国語力は向上し、言語生活も広がっていく。

このように、学習の中で子どもが身に付けた言葉の力は生きて働く力となり、国語科の枠を超えて、他教科の学びや実生活・実社会においても使える国語力となるだろう。

以上のことから、国語科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえる

- ・単元のゴールをイメージし 本時の課題意識・目的意識をもって 自ら学び続ける子
- ・言葉と対話し 他者の思いや考えを共有し 自分の考えをより確かなものにしていく子
- ・国語科で身に付けた見方・考え方を 実生活や実社会に生かそうとする子

## 2 国語科における未来へ生かす決める授業デザイン

国語科の授業において、話したり聞いたり書いたり読んだりしながら国語力を向上させていくことは、指導事項を身に付けるだけでなく、各教科の実生活・実社会に生きて働く言葉の力を身に付ける上でも重要である。国語力を向上させるためには、まず、今までの学習経験や生活経験を想起させながら、子どもに好奇心や学びの必要感をもたせ、単元のゴールを意識させることから始まる。そこに、相手意識ももたせることで、相手を意識した内容や表現方法等を考えるようになる。そうすることで、学習計画を立てることへとつながっていき、学習の見通しがもてるようになる。こうして、目的意識が明確になる。

言葉や叙述から自分の思いや考えに根拠をもつことができたときに、その思いや考えを友達と対話したり、別の視点から考え直したりして比較し合う中で、お互いの相違点に気付く、様々な考え方があることに気付くことができる。友達の考えや別の角度からの視点によってもう一度、自分の考えを決め直す。そうすることで、様々な見方・考え方を広げたり、深めたりしていくことができる。

これらの学習をくり返していく過程で、毎時間の授業では、ふりかえりを行う。わかったこと等をふり返ることで自分の考えを再構成することができる。今まで決めたことをふり返ることで、新しい言葉や表現を再認識し、自分が決めるに至った考えの形成を省みることができ、自分で決めたことに達成感を味わうことができると考える。単元末には、省察を行う。単元を通して身に付いた力を子どもに認識させることで、自己の成長を感じたり、学んだことを実生

活や実社会のどんな場で生かせるか考えたりするだろう。そうすることが、単元で身に付いた力を活用する経験へとつながり、国語力をさらに高めることへとつながっていく。

このように、ふりかえり・省察をしたり、単元で身に付けた力を活用する経験を積み重ねたりしていくことで、未来に必要な国語力を高めたことが自覚できるようになると考える。

### 3 決める授業の手だて

#### (1) 学びへの原動力を形成する「決める」

既習の学習経験や生活経験等を関連付けながら、単元を通して子どもが学びに向かって自ら進んでいけるような単元のゴールや学習活動を子どもとともに決めていく必要がある。「やりたい」「知りたい」という好奇心や、「できるようにになりたい」という必要感を子どもにもたせるために、モデルとなる成果物や既習の学習経験で解決するには少々難しい課題を提示する。好奇心や必要感をもち意欲が生まれることで、最終活動である単元のゴールが決まる。そして、相手を決めるために、ゴールが誰に向けたものにするのか考えさせる。単元のゴールと相手ははっきりしたことで、ゴールに向けて必要な学習活動は何かを考えるようになる。相手が興味・関心を引くような内容を考えたり、相手に応じた表現方法等を考えたりすることで、自分たちが学ばなければならないことは何か考える（決める）ようになる。こうすることで、学習活動がはっきりし、学習の見通しがもてるようになる。こうして、相手意識をもち、単元のゴールに向けて何をしなければいいのか明確になったことで、目的意識をもって学習に取り組むことができる。それが学びに向かい続ける力の原動力となり、自分でよりよく決めることへとつながると考える。

#### (2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

教師が板書等で視覚化の工夫をしたり、新しい視点を提示し焦点化したり揺さぶったり疑問や対立を生み出したりすることで、子ども同士が言葉をもとに対話するようにする。こうすることで、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。そして、もう一度自分で試行錯誤しながらその過程を順序や筋道を立てて考え直し、自分の考えをもう一度決める場を設定する。

同じ言葉から違う考えをもつこともあれば、同じ考えでも根拠にする言葉が違うこともあるように、出会った言葉のとらえや解釈は子どもによって違いがある。子どもが言葉のとらえや解釈の違いをもとにして考えを広げたり深めたりするためには、一人一人の考えの違いに対し言葉を根拠にして交流し、他者の考えと比べながらもう一度自分の考えを決め直すことが大切である。

#### (3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

本時の学習の終末において、ふりかえりを行う。本校の研究に沿って、ふりかえりには、L（わかったこと）、F（友達の意見でよいと思ったこと）、T（これからやってみたいこと、感じたこと）という三つの点について書くことを基本とする。ただ、単元や発達段階によって、三つの点については弾力的に運用することにする。例えば、Lには、わかったことだけでなく、よくなったことやよくなかったこと、単元の中で付けた力に即したこと等を書くというように、もう少し視点を細分化して書かせることで、具体的な自己の成長や課題を明確にさせていく。どの言葉で自分の考えが深まったのか、自分がどのようなことを学んだのか等をふり返ることで、自分の学びを自覚し、自己を見つめ直すことが、次の学びへの意欲へとつながっていく。

また、単元末には省察を行う。単元を通して身に付いた力や自分の考えの形成に至るまでの過程をふり返ることで、自分の学び方を自覚し、自己の成長に気付くことができる。また、学習のまとめとして、これまでの学習を通して形成された自分の考えを、単元に設定された言語活動の中で表現できるようにする。そうすることで、単元のゴールが達成され、学んだことが実生活や実社会の中で生かせることにつながっていく。

このように、ふりかえり・省察をしたり、単元で身に付けた力を活用する経験を積み重ねたりしていくことで、未来に必要な国語力が高まっていくと考える。